

アレックスサンドロ・ スカルラッティ 没後300年記念 シンポジウム ミニ・コンサート付

バロック・オペラの規範の確立と展開

2025年12月6日 **土** 13:00～19:00

早稲田大学小野記念講堂

早稲田大学早稲田キャンパス27号館 地下2階

入場無料(要申込)

ご来場・オンラインでのご参加にあたって、12月4日(木)までに、
あらかじめ右記のURLもしくはQRコードよりご登録をお願いいたします。

<https://forms.gle/5jZpYF4QiUnSs6Ek9>

※**オンラインでは研究発表のみ**ご視聴いただけます。



司会

石井道子

早稲田大学・
早稲田大学 オペラ／音楽劇研究所所長

コメンテーター

野田 農

早稲田大学・
早稲田大学 オペラ／音楽劇研究所員

第1部

13:00～14:00

趣旨説明

大河内文恵

東京藝術大学附属高校・
早稲田大学 オペラ／音楽劇研究所招聘研究員

「特別講演」 **ディンコ・ファブリス** Dinko Fabris
(収録)

バジリカータ大学・
国際音楽学会元会長

第2部

14:00～17:00

「イタリア」
+コンサート

辻 昌宏

明治大学・
早稲田大学 オペラ／音楽劇研究所招聘研究員

萩原里香

武蔵野音楽大学・
早稲田大学 オペラ／音楽劇研究所招聘研究員

佐々木なおみ

ディスコルシ・ムジカーリ

山田高誌

熊本大学

第3部

17:00～19:00

「各国受容」
+コンサート

森本頼子

名古屋音楽大学・
早稲田大学 オペラ／音楽劇研究所招聘研究員

田中伸明

北里大学・
早稲田大学 オペラ／音楽劇研究所招聘研究員

吉江秀和

杏林大学・
早稲田大学 オペラ／音楽劇研究所招聘研究員

★演奏協力

森川郁子 (ソプラノ)

阪永珠水 (ヴァイオリン)

森有美子 (ソプラノ)

高橋弘治 (チェロ)

上羽剛史 (チェンバロ)

主催:早稲田大学総合研究機構 オペラ／音楽劇研究所

後援:早稲田大学総合研究機構、イタリア文化会館



オペラ／音楽劇研究所「バロック・オペラ」ワーキンググループ企画

2025 年に没後 300 年を迎えるアレッシェンドロ・スカラッティは、ナポリ楽派の祖、そして“古典オペラ”の構造のスタンダードを作った存在として知られます。一方、その生涯や作品の真価の探求はまだこれからの課題です。本シンポジウムでは、彼がオペラ作曲家として活動した 1679 年から 1721 年を概観するため、ローマで上演された最初のオペラ（1679）、イタリア古典歌曲集「すみれ」の原作で知られる中期の名作《ピッコとデメートリオ》（1694）、ほかヴェネツィアやナポリで上演された中高期の作品の分析から、彼の創作を様々な角度から明らかにするとともに、さらに彼がイギリス、ドイツ語圏、ロシアにおいてどのように受容されていたかを探ります。

大河内文恵（「バロック・オペラ」ワーキンググループ代表）

<特別講演>（収録）

ディンコ・ファブリス Dinko Fabris アレッシェンドロ・スカラッティ研究の現在

<発表要旨>

辻昌宏 《Gli equivoci nel sembiante》ローマ初演をめぐるスキャンダル

A.スカラッティのローマ・デビューはスキャンダルを巻き起こした。四句節に彼の作品《Gli equivoci nel sembiante 顔だちで取り違え》が上演され、教皇の逆鱗に触れたのだ。しかしその時彼はすでにスウェーデン女王クリスティーナの庇護下にあつたために事なきを得た。その状況及び顛末を音楽とパトロンという観点から、そして作品がどんな内実を持ったものだったのかとあわせて紹介したい。

萩原里香 A.スカラッティのオペラの再演をめぐる状況：《ピッコとデメートリオ》のシエーナ上演を対象に

アリア「すみれ」を含む《ピッコとデメートリオ》は、1694 年にナポリで初演されたのち、直後にローマで、数年のうちにミラノ、シエーナ、フィレンツェ、18 世紀に入ってからロンドンでも再演された。上演ごとに若干の改変が行われているが、とりわけシエーナ上演では、唯一プロローグが設けられており、数ある再演のなかでも注目に値する。A.スカラッティ作品のひとつの再演を対象に、地域色ならびにその地のパトロンとの関わりに焦点をあてる。

佐々木なおみ 創作の背景から見るオペラ《ミトリダーテ・エウパトール》

1707 年ヴェネツィア初演のオペラ《ミトリダーテ・エウパトール》（5 幕の悲劇）は、同年のオトラリオ《カイン》と並ぶ A.スカラッティの傑作である。しかし初演は不評と伝えられており、実際、彼は以後ヴェネツィアでの上演も、悲劇の作曲も行っていない。本発表では《ミトリダーテ》の創作から初演に至る背景を明らかにしつつ、その音楽的特質と初演失敗の要因について検討し、A.スカラッティの後の活動に与えた影響についても考察する。

山田高誌 《貞節の勝利》（ナポリ、フィオレンティーニ劇場、1718）：初演劇場とジャンルに関わる“コンテキスト”からみて

A.スカラッティ唯一の喜劇オペラとして近年各地で上演される《貞節の勝利》、喜劇役もすべて「トスカーナ語」で書かれている点で同時代ナポリの民間劇場において新しい趣向となっている。本発表ではこの作品が初演されたフィオレンティーニ劇場で上演された同時代の喜劇オペラの構造、喜劇役の役割と比較して、さらに献呈されたオーストリア副王ダウン伯爵の動向などから、この作品がどのように同時代のナポリの喜劇オペラと“同じ”で“異なっている”のか、コンテキストとともに作品を見ていきたい。

森本頼子 18 世紀ロシアとナポリ楽派のつながり

ロシアで本格的なオペラ上演が始まったのは 1730 年代で、残念ながら、当時 A.スカラッティのオペラが上演されたという記録は見当たらない。しかし、ロシアでは 18 世紀を通じて、ナポリ楽派の音楽家（アライヤ、トラエッタ、バイジェッロ、チマローザら）が宮廷に仕えたほか、諸劇場で彼らのオペラが上演された。本発表では、18 世紀ロシアの音楽界とナポリ楽派のつながりを整理し、ロシアのオペラ文化における影響力について再考する。

田中伸明 ドイツにおける A.スカラッティ受容とサンティーニ・コレクション

本発表は、ドイツ語圏における A.スカラッティ受容の様相を、①1750 年頃までと②19 世紀以降の二期に分けて考察する。①ではハイネやクヴァンツの証言、ハッセによる改作に言及しつつ、ベルリンやアンスバッハの宮廷におけるオペラ上演実態を報告する。②ではツェルターとサンティーニの交流を軸に、宗教作品の受容を含めた 19 世紀の再評価の様相を明らかにする。

吉江秀和 《ピッコとデメートリオ（ピュロスとデメトリオス）》のロンドン上演について

A.スカラッティの《ピッコとデメートリオ》が 1708 年にロンドンで上演された。これは A.スカラッティの作品そのままではなく、ハイムが一部のアリアに曲をつけ、スウィニーが部分的に英語に翻訳したかたちで上演されたパステッチ・オペラであった。本発表では、このような形態がとられた理由を当時のロンドンでのイタリア・オペラ上演状況とともに確認し、この作品の上演の意図、どのような変更が加えられたのかを取り上げる。

<演奏曲目>（予定）

《顔だちで取り違え》

クローリ レチタティーヴォ「Or col dardo（今、その矢で）」（II-1）

クローリ アリア「Vaghe rose（美しいバラは）」（II-1） など

《グリゼルダ》

コスタンツァとロベルト デュエット「Bella mano -- Destra cara（美しい手、、、かわいい右手）」（III-9）

合唱「Cornonatevi di fiore（花で額を飾ってください）」（III-最終場） など

《ピッコとデメートリオ》

マリオ アリア「Ruggiadose, Odorese（露に濡れて香っている）」「すみれ」（II-2）

マリオ アリア「Con cento baci（100 のキスで）」（III-11） など



ソプラノ 森川郁子



ソプラノ 森有美子



ヴァイオリン 阪永珠水



チェロ 高橋弘治



チェンバロ 上羽剛史

早稲田大学 小野記念講堂 早稲田大学早稲田キャンパス 27 号館 地下 2 階

<アクセス>

JR 山手線／西武新宿線：高田馬場駅より徒歩 20 分 地下鉄東京メトロ東西線：早稲田駅 3b 出口より徒歩 5 分

東京さくらトラム（都電荒川線）：早稲田駅より徒歩 5 分 都営バス：早大正門前停留所より徒歩 1 分

※アクセスマップ https://www.waseda.alumni.jp/docs/waseda_map.pdf

<問い合わせ先>scarlatti.baroque.opera@gmail.com／「バロック・オペラ」ワーキンググループ（代表：大河内文恵）